

*ホレーシェとは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



—チェルノブイリに思いをよせて—

ホレーシェ

2009年 菜の花プロジェクト加速 !!

世界を「希望のサイクル」に変えよう !

昨年は、「政治」「経済」「生活」そして「気候」に至るまで、まさに「変」の年でした。我が国は、変わろうとして変われない「変」な国、世界はよくも悪くも「チェンジ」を選択しました。

日本の「核燃サイクル」の二大施設の一つ「もんじゅ（高速増殖原型炉）」では、ナトリウム漏れ検出器の施工ミスが発覚し、その後、排気ダクトの穴も見つかりました。もう一つの「六ヶ所再処理工場」では、高レベル放射性廃液とガラス材料を混ぜ合わせる溶解炉で、炉内をかきまぜる金属棒が変形し、炉内の一部が損傷していることがわかりました。どちらの計画も、延期につぐ延期を余儀なくされています。

また浜岡原発では、遂に、老朽化した1号と2号の廃炉が決定され、一方で、新たな原発6号を（東海大地震の震源域の真上に）建設するという方針が発表されています。

「地球温暖化防止」キャンペーンによって、原発回帰を議論む動きも出てきています。

しかし、「変化」の方向をまちがえてはいけません。行き詰まる「核燃サイクル」に別れを告げ、汚れてしまった地球を救う「希望のサイクル」へと、私達の未来を変えていかなければならないのです。

菜の花による大地の再生は、「希望のサイクル」を生み出します。

私達の「菜の花プロジェクト」は、世界に発信します。

今までの流れに押し流されてしまえば、今年の日本はまちがいに危機の「危」。

しかし、私達自身が変わっていけば、それを希望の「希」に変えることができます・・・と。 (J)



＜分析用サンプルを採取する農大研究員＞

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中音部 代表：小牧 崇

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

X'masカード&ミルクキャンペーン

昨年の12月14日まで行っておりました「クリスマスカード・キャンペーン」が、無事終了いたしました。今年も皆様のご協力により、たくさんのカードをウクライナへ届けることができました。全国各地からなんと1,986通ものカードが集まりました！皆さんが贈ってくださった一通一通のカードが、遠い国ウクライナの子ども一人一人を励ますのです。そう考えるだけで、寒い冬でも身体が暖かくなるように感じます。

1…9…8…6……！？皆さんお気づきですか！？

そうなんです！なんと今年皆さんが送ってくださったカード総数の数字と、チェルノブイリで原発事故が起きた西暦年数が、ピッタリ一緒なんです！事務局員も数え終わってビックリ！こんなことってあるんですね。これも何か意味があるのでは？…っと、考えてしまうところです。

その1,986通の温かいクリスマスカードですが、支援者の方々からいただいた折鶴や折り紙のコマ、小さなウクライナ語のメッセージカードを添えて、12月19日に事務局からウクライナへ送りました。そして、ウクライナ正教のクリスマスの日に、無事に子ども達の小さな手へ届けられました。カードを受け取ったウクライナの病院や孤児院や小学校の子ども達も、きっと喜んでくれていると思います。心のこもったカードばかりですから。

近々、その様子を写真で皆さんにお伝えできるとと思います。お楽しみに！！

原発事故の被害が続く限り、このキャンペーンは終わらせません。来年のクリスマスも、皆さんの温かいお気持ちをお待ちしております。

また、ミルクキャンペーンでも皆さんの温かいご協力をいただくことができました。チェルノブイリの原発事故から、もうすぐ23年になります。しかし、事故の被害はいまだに続いているという現状があります。子どもの健康を守るために、自分の母乳をあげられない母親が、ウクライナにはいるのです。その母親の気持ちを考えると、胸が詰まるばかりです。

事故の被害を断ち切るために、小さな子どもの健康を守るために、これからもミルクキャンペーンを続けてまいります。皆様のご協力を心からお待ちしております。
(黒瀬 愛見)



活動報告とお礼 【12月の寄付金100万円突破!!】

昨年12月、皆様の温かいご協力のもと、「菜の花プロジェクト」や「ミルクキャンペーン」などに対して、総額100万円を超えるご寄付が寄せられました。ありがとうございます。



また、ご寄付とともに暖かいメッセージも添えられ、冬場はとても寒い事務所ではありますが、とても心温まるものでした。

昨年の9月に「菜の花プロジェクト」成功への第一歩を踏み出す事ができたのも、多くの支援者の方々からのご協力があったからこそと、身にしみて感じる事ができました。チェルノブイリの大地を再び蘇えらせるためには、これから先もたくさんの資金や時間が必要です。一方で、そこに住む人々の生活そのものを支援することも欠かせません。皆様からの暖かいご寄付(1,149,191円)は、チェルノブイリの被災者の医薬品代や子ども達へのミルク代として、大切に使用させていただきます。(山本 梨恵)

サレジオ小学校のクリスマス会に行ってきました。

(黒瀬 愛見)

昨年の12月23日(火)、静岡県にあるサレジオ小学校で行われたクリスマス会に行ってきました。

学校に到着して、まず立派な校舎に驚きました。会場であるマリアンホールはきれいで広いホール。前方に舞台があり、向かい合う形で座席が数百席ありました。その日は、来場者でほぼいっぱいになっていました。舞台上で行われた主な出し物は、4年生の創作オペレッタ「オズの魔法使い」と6年生の「クリスマス・ページェント」。

創作オペレッタ「オズの魔法使い」は、小学生とは思えない完成度で本当に驚きました。主役のオズ役の生徒の歌唱力もさることながら、「脇役」といわれる役の生徒もみな、「主役」のように生き生きと役を演じていました。「このオペレッタのために、どれだけ練習してきたのだろうか…!!!」と、つい考えてしまうほど、素晴らしいものでした。

「クリスマス・ページェント」はオペレッタと少し違い、会場を巻き込んで行われました。6年生の生徒が、聖書に出てくるいろいろな人物に扮し、この一年の行事やその成果などを発表してくれました。その中で、「チェルノブイリ救援・中部」の活動説明と寄付をする旨が、来場者全員に伝えられました。その後、この一年間のサレジオ小学校全校生徒の活動成果である寄付金と、父兄からの寄付金が、舞台上のイエス様に扮した生徒の前に置かれ、寄付金への想いと意味を会場全体で再確認しました。また合間には、生徒を含めた来場者全体で歌う歌もたくさん盛り込まれていて、とても素敵なページェントでした。これらのなかで、ひとりひとりの生徒が、本当に一生懸命に自分の役目を全うしている姿が印象的でした。その姿に、柄でもなくウルウルしてしまうほどでした。

また、今年一年間の活動が何のために行われ、どのような成果につながるのかという事を、生徒自身がきちんと認識している事にとっても共感しました。それと同時に、その成果を受け取る側の、私たちの責任の重さも感じました。寄付金を直接受け取るというのは、私にとって初めての経験だったのですが、その初めての経験の場がサレジオ小学校のクリスマス会で、心からよかったなと思っています。

…以下余談です…

正直なところ、スピーチをするということで本当に緊張していました。「何を話せば良いのだろう…アホな事言ってしまったらどうしよう…!!!」と、前の晩はなかなか寝付けなかったほどです。

そして当日、あまりにも頭がいっぱいで口から泡を吹きそうになっていたところ、一緒に行った山本さんと隣に座ってみえたシスターがお話しているのを見て、私は唐突に「スピーチ、とても緊張しているんです!」っと、シスターに口走ってしまいました。すると、シスターは優しい目で「みなさん、受け入れてくれますよ。」と教えてくださいました。本当にやさしい目をしたシスターでした。

では実際のスピーチはどうだったかといいますと、一言で終わってしまいました。ああー、緊張した! …またまた余談です…



「チェルノブイリ救援・中部の事務局って何してるの?? どんな人たちがいるの??」という疑問を、研修生が研修生の目線で解明していくべく、**ブログを立ち上げました!** その名も『**チェルノブイリ救援・中部 インターン生とゆかいな仲間たち**』!!! 「インターン生」とは、研修生である私の事です。

…じゃ、ゆかいな仲間って??? 気になった方はこちらへどうぞ↓↓↓

<http://blog.goo.ne.jp/chq/>

また、このブログは支援者の方々との交流の場になればと考えて作りました。なにか簡単なコメントや質問などをいただくと、大変嬉しいです!

お待ちしております。

「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」2年目の活動報告会 開催

去る12月13日に、ウィルあいち(名古屋市)で「菜の花プロジェクト」実施2年目の報告会を開催しました(これは、ゆう貯財団「NGO 講演会等費用助成」を受けて行われました)。

まず最初に、宮腰吉郎さん撮影のDVDによって、ナロジチの風景を折り混ぜながら、現地の土地管理ステーションで行われた作業風景や、バイオディーゼル燃料(BDF)製造装置を設置するための建屋改修工事に関する、緊迫した議論などが映し出されました。建設・設置の専門家として派遣された運営委員の原富男さんは、いつもの柔和な表情と違う、緊張した厳しい顔つきで、建設業者や行政の担当者などと話し合っていて、その時の状況がいかにも厳しい局面だったかを物語っていました。見守る会場の聴衆も思わず緊張して、身を硬くして見入っていました。



2008/12/13

その後、9月にBDF製造装置メーカーのMSD社(山形県)社長の武田さんに現地出張してもらいましたが、日本とは違う条件下で試運転に奮闘されている様子や、実際に初めて製造された黄金色に輝くBDF、それを入れたトラックが順調に走り出す光景に感激しました。

次に当の原さんが、改修工事の経過説明を行いました。ウクライナでの建設に関する法的な問題や、工事費交渉の駆け引きなどの苦労話が、とつとつとした口調で語られました。

新聞に掲載された「菜の花プロジェクト」の記事で興味を感じたという人など、今回初めて参加された方が多く、一般から25名の参加者がありました。参加者からは熱心な質問がいろいろ出され、「プロジェクト」への関心の高さがうかがわれました。

ティータイムには、原さん手作りの干し柿などをほおぼりながらそれぞれ歓談し、これまで代表団メンバーが取りためた写真から、ナロジチの人びとや風景を選んで新しく作成された、絵葉書セットも人気でした(4枚セット200円!! 発売中!)

最後に、河田さんが「菜の花プロジェクト」実施2年目のまとめを、パワーポイントで写真や資料を示しながら報告しました。



09年春には、「プロジェクト」3年目に入り、バイオガス装置の建設にも取り掛かります。この冬もまた、ロシアからEU諸国への天然ガス輸出で、ウクライナ経由パイプライン停止という政治問題が起こり、ヨーロッパの人びとに大きな影響を与えました。ナロジチ地区でのバイオエネルギー製造が実現できれば、エネルギー問題への一石となるでしょう。今後もナロジチから目が離せません!!

(京)

六者契約（補則）締結において（神谷 俊尚）

昨年11月、ウクライナ現地で行った「**六者会談**」（ポレーシェ108号参照）で合意されたのは、

- ①「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト（PJ）」の現地活動は、農大の管理下でBDFプラントの稼働を計り、製造されたディーゼル油は、住民の利益に使っていく。
- ②バイオガスは、09年に法的調査を行い、ミニプラントを住民が実感できる場所に作る。
- ③必要な契約の変更を2月に行い、ウクライナ側のまとめを農大ディードゥフ氏が行う。

上記に基づき、12月12日に、次の①②に関する**ウクライナ側の提案**が届きました。

- ①契約の目的は、ナタネによる土壌浄化およびバイオ燃料（BDF・BG）製造に関して、実験的・科学的な性格と規定する。
- ②BDF・BG実質稼働に対し、目的・活動主体者の権利・義務について、具体的に規定する。

これをうけて、「今後の課題・方向性、スケジュール、契約内容」を協議し、**日本側提案**をまとめました。

土壌浄化:学術的研究の継続、栽培条件・研究成果の報告

BDF:プラントの定常稼働を目指し、当面は種子を購入するが、栽培面積を拡大し、生産されたディーゼル油は、栽培・スクールバス等住民の利益の為に利用する。

BG:認知度を高める為にミニプラントを設置、法的調査の後、秋には本プラントの建築申請。2010年度に着工し、用途としては発電・温水・ガス使用を検討する。

地域復興:PJの広報活動を積極的に展開・報告会の開催・現地地方紙への掲載等による連携強化、住民の自主栽培に向け種子の無料配布、BDFオペレーターの公募、現地の奨学生等のPJへの参画等々。

国内活動:ウクライナ側専門家を招聘し、報告会を開催。BDFの積極的な活用の為、スクールバス・救急車等を現地に送るキャンペーンを考えて行く。

これらの課題の実施タイムスケジュールを作成し、契約内容の検討を行いました。日本案をウクライナに送信、若干の修正案がウクライナから返信され、1月10日の運営委員会にて「日本側最終案」を確認、ウクライナへ送信しました。

【契約(当契約)内容の要点】

- A) 当契約は、07年締結の『ナロジチ再生・菜の花プロジェクト』に関する契約書（本契約）の趣旨に基づいて実施されるバイオ燃料（BDF・BG）製造に関して、その目的・活動主体者の権利・義務を明確にし、本契約を補則するものである。
- B) 当契約は、バイオ燃料製造に関する活動主体者に係る契約であり、契約者を「ホステージ基金」「国立農業生態学大学」「土地管理ステーション」「チェルノブイリ救援・中部」の4者とし、「ナロジチ行政庁」「ナロジチ地区議会」は、契約内容の承認者として署名・捺印する。
- C) 当契約の要約
 - ①土壌浄化およびバイオ燃料製造に関する契約で、実験的・科学的な製造の性格を持ち、締結者は菜種栽培による土壌浄化、菜種を安全に処理し燃料製造・活用する研究を目的に、協力の義務を負う。
 - ②国立農業生態学大学地域エコロジー問題研究所の支部を、現地ナロジチに設立し、菜種栽培・土壌浄化の実験・研究の継続、バイオ燃料の実験的製造と活用の為のシステム確立を行う。報告書・セミナーの開催等を行う。
 - ③各締結者・承認者の義務が、ナタネ栽培とバイオ燃料製造に関して具体的に明文化され、活動の責任分野が明確になっている。

当契約は、2月訪問団滞在中に調印され、効力を発します。建屋改修以来の現地規制の多くの壁も、それぞれの立場から解決して行く方向にあり、PJの3年目に期待が膨らんできました。

<2月訪問団のお仕事 紹介>

(原 富男)

2月4日から16日までの13日間、河田・遠藤・原の3名で、ウクライナを訪問することになりました。

月日(曜日)	予 定		宿 泊
2月4日(水)	セントレア発(11:00) LH737⇒フランクフルト着(15:25)		フランクフルト
5日(木)	ドイツ・ユーンデ村のBG見学		フランクフルト
6日(金)	フランクフルト発(9:50) LH3236⇒キエフ着(13:15)	ジトーミルへ	ジトミル
7日(土)	農大・ホステージ基金とのミーティング		ジトミル
8日(日)	ジトミルからナロジチへの移動日		ナロジチ
9日(月)	*6者会議と農大の研究成果の報告会	(ナロジチの5日間、月～金は順不同、現地との調整必要)	ナロジチ
10日(火)	*BGプラント設置場所視察		ナロジチ
11日(水)	*BDFプラントの視察とミーティング		ナロジチ
12日(木)	*BDF・BGプロジェクト調査		ナロジチ
13日(金)	*ナロジチからジトミルへ移動		ジトミル
14日(土)	ジトミルからキエフへ。日本大使館訪問(予定)		キエフ
15日(日)	キエフ発(6:55) LH3233⇒ミュンヘン着(8:25) ミュンヘン発(9:50) LH967⇒フランクフルト着(11:00) フランクフルト発(14:00) LH736⇒		機中
16日(月)	セントレア着(9:30) 帰国		

今回のウクライナ訪問の目的は、①昨年まで2年間かけて取り組んだ「菜の花プロジェクト」を振り返り総括すること。②バイオディーゼル燃料(BDF)装置の本格的稼働の準備。③バイオガス装置着工に備えて、見本装置(ミニ装置)の着工場所を視察すること…の3点です。またウクライナへの経由地をドイツに決め、バイオ先進国ドイツのバイオガス事情も視察することになりました。

*土壌浄化

まず2年間のプロジェクトの総括の一つは、「菜の花を用いた汚染土壌の浄化」です。この研究のため、今までにナロジチ地区の畑で、春撒き2回・秋撒き2回を実施してきました。「肥料や水分量が、どのように影響するのか」、また「放射線を吸収する最適な条件は何か」などについても研究が進められ、約800検体のサンプルを得ることができました。多量なサンプル故に、実験結果はこれまで「まとめ」ができずにいました。そのため、私達にも実験結果は断片的にしか伝えられなかったのですが、2006年春から農業大学のディードフ助教授に研究を委託し、今回2年間の研究成果がまとまりました。そこで、地元ナロジチ地区で報告会を行うことになりました。関係する6者をはじめ、地元ナロジチの住民にこの研究成果が報告されることとなります。これにより、今後どのように土壌浄化を進めるかという具体的な検討ができるわけで、今後の研究の方向性や、地域再生への見通しと課題も見えてくるでしょう。

*バイオディーゼル燃料(BDF)の製造

バイオディーゼル燃料(BDF)の製造に関しては、昨年9月までに製造装置を設置し、試験的にBDFを製造できるようになりました。今年は、これを更に発展させ、本格的にBDFを生産できるように、色々な準備をしなくてはなりません。まず、ナタネを搾油するために、搾油機を購入しなければなりません。さらに、住民にナタネを自分の畑に撒いてもらうよう、働きかけたいと思います。住民が撒いたナタネで装置をフル稼働させるまでには、まだまだ時間がかかりますが、その準備は今から

しなければなりません。BDFの生産量をどのレベルまで上げるか、現場で従事する人の教育・訓練・体制なども改めて考えなければなりません。また、BDFをどこのトラクターやバスなどで使うかという点も、今回の訪問での協議すべき課題です。

*バイオガス発生装置

菜の花プロジェクトの3つ目の柱は、バイオガスです。バイオガスの主目的は、放射能を含むバイオマスコンパクトにして乾燥させ、保管しやすくすることです。つぎに副次的に生産されるバイオガスの利用方法が課題となります。発生したバイオガスを煮炊きに使うのか、ガス発電に使うのか、その方法と課題についても考えなくてはなりません。

本格的なバイオガス発生装置を作る前に、地元の理解を得るために見本装置を作ることになっており、その見本装置は今年4月に着工したいと考えています。候補地を実際に見せてもらい、4月からの工事をどのように進めるのか、検討し準備することになります。

私達のプロジェクトの目的は、汚染地域の復興モデルを提示することです。ドイツは、世界で最もバイオエネルギーの利用が進んでいます。そのため、今回のユーンデ村視察を通して、未来のナロジチに提案できるシステムを見つけたいと思います。

*今年度の事業計画

その他、シトームルでは今後1年間の事業の進め方や事務的な話し合いなども行わなければならず、例によってハードな日程となります。今回は、常連の河田さんに加え、長野で大工をしている遠藤さん（スタディツアー参加者）が同行されます。職人的な考え方で、私達に足りない部分を考えてもらい、ウクライナ訪問二度目の新鮮な感覚で、今後のプロジェクトの展開をも見通してもらえるのではないかと思います。これは、私達にとってプラスになることであり、大いに期待しています。

—————*—————*—————*—————*—————

ナロジチを希望の大地へ！ （長野県富士見町 遠藤 雄二）

2008年6月のスタディツアーに参加して、「ナロジチのひまわり幼稚園の子ども達の8割近くが、病気である」ことが、私には悲しい現実として心に残っていました。

帰国して、9月に次女に女の子が生まれました。同居しているため、毎日母乳を飲んでいる元気な孫を見ていると、ナロジチの悲劇が思い起こされ、自分に何かできることがあればと思っていました。

今回、2月にバイオガス装置の下見に参加できることは嬉しいことですが、自分に何ができるのかと思うと不安が募ります。2年前、わが家に尿処理と同時にバイオガスと堆肥を得ることができる「バイオガス槽」を作りました。今回、バイオガス装置をナロジチに作るようになった為、今まで放置しておいたバイオガス槽にガス配管を取り付けようとしたら、ガスが発生していませんでした。

かなりの金額と労力をかけて作ったバイオガス装置は失敗作でした。自分の物ならば諦めればよい事ですが、ナロジチではそのような失敗はできないと思うと、現在の私のバイオガスに関するわずかな知識では、いろいろと思悩む毎日です。今回のウクライナ行きでは、ドイツのバイオガス装置の視察もあり、自分の知識を増やして自信を持てるようにしたいと思います。

ナロジチの人々のエネルギー消費量に比べると、われわれ日本人は無限に消費しています。また、日本はエネルギー自給率がゼロに近く、一方で、生ゴミや尿尿・汚泥・その他の有機物を、大量の石油を使って処理しています。本来は、日本こそが、バイオガスを研究すべきです。

菜の花プロジェクトにより大地がよみがえり、自給できるバイオ燃料・バイオガスによって少しでも生活が豊かになり、ナロジチの人々が希望をもって生活できることを願っています。



『ナロジチ再生・ナタネプロジェクト研究報告 '07』(第一報)

ウクライナ国立ジトーミル農業生態学大学地域エコロジー研究所 所長 N.I.ディードゥフ

2007年4月から始まったこのナタネプロジェクトは、これまで実験室の研究にとどまっていた土壌浄化の可能性を、原発事故の汚染土壌で検証する試みとして実現した。この事業を我々と協同で行っている、農業生態学大学の報告書(第一報)が完成した(訳・竹内高明)。以下に、43ページに及び力作を要約して紹介する。後日、全文をパンフレットにして公刊する。(河田)

● 研究目的と手法

バイオエネルギーの製造と放射能汚染土壌の浄化を目的とする、ナタネ栽培の有効性の検証が目的である。ポーシェ地帯の強い酸性ポドソル土壌における、ナタネの生育と放射能吸収という二つの条件に対して、最適の栽培方法を探すことから始めた。

春蒔きナタネ 2ヘクタール(ha)を無肥料区、完全肥料 NPKC 区(窒素N・燐酸P・カリK・石灰 CaCO_3)・NK 区・NP 区の4つに区画し、それぞれの区画(平均値を取るためそれぞれの区画で5つの試料を採取)でナタネの根・バイオマス・種子・菜種油の化学分析と放射能分析(セシウム 137 とストロンチウム 90)、栽培前後の土壌の化学成分と放射能分析、という膨大な数のサンプルを分析した。サンプルは約800検体に及び。

● ナタネ栽培の生態学的経済的条件

ウクライナの耕地面積は3,200万ha、その10%でナタネを栽培すれば、ウクライナの農業部門のエネルギーは自給可能である。ウクライナの気候・土壌条件で栽培可能なエネルギー作物は色々あるが、様々な条件を考えれば、現時点で最も有望な作物はナタネである。

現在ウクライナでは、春蒔きナタネ 12.8万ha、秋蒔きナタネ 41.8万haが栽培されている。しかし、ナロジチ地区の土壌条件は、必ずしもナタネ栽培に最適ではない。原因は、冬季の厳しい寒さと、有機質の少ない強い酸性土壌である。

● 試験栽培の結果

2007年の春蒔きナタネに最も大きな影響を与えたのは、ナタネの生育期(4~6月)における降雨量であった。平年の半分に近い

月間20~30mmしかなく、ナタネの生育と放射能の吸収には、大きなマイナス要因となった。その結果、ナタネ種子の収量は、ha当たり1.2~1.7トンしかなかった。無肥料区に比べ、完全肥料区は141%の収量だった。バイオマス(茎・葉など)の収量も、完全肥料区では無肥料区に比べ約40%多かった。ナタネ種子の収量に関わらず、種子の油含量は約40%あった。

また、種子の蛋白質含量と油の含量には、反比例の関係が認められた。肝心のナタネ栽培による土壌中放射能の減少の度合いは、栽培区域内での放射能汚染のばらつきが大きく、明らかな傾向を見出すことは困難だった。

今後の耕作でばらつきの解決が期待される。

● 放射能の吸収部位

今回明らかになった事の一つに、ナタネの部位による放射能の蓄積の違いがある。

Cs137は、種子に50~60%が集中し、Sr90は、バイオマス全体に分布している。また、K肥料区画では、明らかにCs137の吸収を抑制し、N肥料区画では、吸収促進の傾向が見られた。また、種子には放射能が多量に含まれたにも関わらず、その油には放射能が含まれないことが証明された。従って、菜種油は何ら制限なく様々な目的に利用可能である。

土壌からナタネ各部位へのCs137の移動係数が最も大きかったのは、やはり種子で、最大2.38だった。Sr90の移動係数が大きかったのは茎と鞘で、0.4~0.75だった。

土壌の分析値と移動係数の関係を統計分析した結果、移動係数に大きな影響を与える要因は、土壌中の有機物と可動性カリウム含量であることが分かった。

————— 次世代に引き継がれるチェルノブイリ後遺症 —————

22年前のチェルノブイリ原発事故で、多くの人々が被曝した。事故処理作業者は勿論、緊急避難した人々、いまだに汚染地域に住みつづける人々など、数知れない。しかし、被曝による被害者はそれだけではない。放射能を浴びた（あるいは今も浴びつづけている）母親から生まれた子ども達もその被害者である。グリーンピースによる報告（2006年）からいくつかの事例を紹介する。

● 話にならない国連報告

チェルノブイリ事故 20年目にあたり、WHO（世界保健機構：国連の機関）は最終報告書を出した。それは全く話にならない内容である。例えば、チェルノブイリの被曝に直接関係あると判断される死者は 2005年までにたった 50人、その殆どは事故処理業者であるという。また、今後も含めて予想される全てのチェルノブイリ関連の死者は 4,000人に過ぎない、といった内容である。これでは、チェルノブイリ事故の幕引きをしようとする意図が丸見えである。

● グリーンピース報告 2006

グリーンピースの専門家らはこれに対し、ウクライナ・ベラルーシ・ロシアの専門家 52名により、これまで 3国で出版された論文約 400篇をまとめ、「チェルノブイリ事故の人間の健康への影響」と題する 137ページに及ぶ総説を発表した。その中から一部を紹介する。

(<http://www.greenpeace.org/international/press/reports/chernobylhealthreport>)

● 「泌尿生殖器系への影響」から

汚染地域住民の女性の体内に入った放射能は、女性自身やその子ども達に様々な影響をもたらした。「妊娠中に被曝した女性から生まれた子どもには、統計的に有意な性器の異常や性器の発達障害が多数見られ、汚染レベルと相関があった」という。発達異常は、事故後に生まれた女の子で通常の 5倍、男の子で 3倍に上る。2002年に書かれた論文によれば、1 キュリー/km²以上の汚染地域に住む妊婦 1,026,046人の調査の結果、産婦人科関連の病気にかかった人数は、非汚染地域の

それと比べて明らかに高く、時期によっては、非汚染地域の 5.5倍にもなった。ウクライナの汚染地域では、住民の膀胱の前がん症状が倍増した。これは、低レベル放射能汚染と関連付けられている。

● 胎盤に侵入した放射能

セシウム 137 やストロンチウム 90 は、胎盤に蓄積し、胎盤の血流障害をもたらした。胎盤の発達が阻害された結果、胎児の発達に異常を来し、未熟児や先天異常児が多数生まれることになった。「汚染地域の出産異常は 78.2%にも及ぶ」という報告もある。最も多かったのは、仮死状態での出生と、呼吸器系の異常で自力呼吸できない赤ちゃんだった。事故前と比べると、5～9倍に増加した。放射能は、胎盤からさらに子宮内部に入り、胎児に直接的影響も与えた。汚染地域では、新生児の消化器系の発達障害が増加した。胸腺や骨髄など、免疫系の発達に異常をきたす新生児の割合は、被曝レベルと相関があった。その結果、被曝した母親から生まれた子どもは病気にかかりやすく、場所によっては健康な子どもは 9%しかいないところもあるという。子どもの体内で最も放射能が蓄積するのは、骨である。それはストロンチウム 90 が、骨を作るカルシウムに化学的性質が似ているためである。汚染地域の母親から生まれた子どもの肋骨や背骨・歯には、多量の放射能が蓄積し、骨の発達にも異常があるという。幼年時代に被曝した女性の妊娠率も大幅に低下し、多量に被曝した場合 12.5%まで低下した。これら全てのデータは、チェルノブイリの影響が次世代にまで引き継がれることを示している。(河田)

【スタディツアー勉強会 in 名古屋】で学んだこと

2008年12月20日(土) / 名古屋 NGO センターにて

第1部 「スタディツアーにおける感染症対策」

講師: 愛知国際病院 宮崎 雅 医師(内科)

【要約】…海外では、疾病・事故・中毒・感染症などの、医療的な判断が必要となる場面がある。スタディツアーに参加する時、「もし発症したら?」「もし事故に遭ったら?」

「判断が必要な症候を現地語で知っている?」ということ想定し、「いつ、どこへ行くのか?」「そこで何をするのか?」「その国では、どんな病気が流行っているのか?」「予防方法と治療は何か?」「どこで治療するのか?」など、あらかじめ訪問する国の事情を調べておく必要がある。では、どのように自分自身を守るのか? 「ワクチンの要否判断は?」「持参薬は何を持っていくのか?」「飲料水や食事は?」「虫に刺されないか?」「動物と関わらないか?」「水の中に入らないか?」「仕事で怪我をする可能性はあるのか?」「現地での医療施設はあるのか?」「日本まで緊急帰国できるのか?」を調べておく。そして、改めて「なぜ行くのか?」「なぜその国でなければならないのか?」を自問自答し、「命にかかわること」と自覚して出掛けなければならない。「自分の安全は、自分自身で守る」こと。



(写真名古屋 NGO センター提供)

第2部 「旅行業法と NGO のスタディツアー」

講師: 榊風の旅行社 原 優二 氏 & (特活)地球の友と歩む会 LIFE 事務局長 米山 敏裕 氏

【要約】…「旅行業法」における「旅行業」とは、看板を挙げてPRし、報酬を得る事業を行うこと。1回だけの企画ならば事業ではないが、継続すれば事業(=旅行業)になる。従来は、会報によって NGO 組織内のみに参加を呼びかける身内の旅行だったが、現在はホームページやインターネットにより不特定多数向けの募集となった。

第1種旅行業者の広報と同じ扱いになったが、NGO 団体は「旅行業法」上の登録をしていないので、スタディツアーは違法扱いになる。ただし、旅行業約款の旅行条件は、本邦出入国に限る法律なので「現地集合・現地解散であれば違法ではない」が、主催者責任は免れない。2005年の「旅行業法」改正により、企画旅行を実施した場合の旅行会社の責任は、更に重くなった。企画旅行実施中に事故が起きた場合、「特別補償規定」という無過失責任を負う。旅行会社に責任が全くなくても、払わなければならない。「旅行業法」違反をして実施したのに、事故がなかったために問題が生じなかっただけである。旅行会社が、「特別補償保険」「事故対策費用保険」に加入しているかどうかは、重要な問題である。

第3部 スタディツアーでのリスクマネジメント、ワークショップで学ぶスタディツアー」

(特活)地球の友と歩む会 LIFE 事務局長 米山 敏裕 氏

【要約】…「海外へ出かける」ということは、「(日本人として)保護された環境から外に出る」こと。抵抗力のない環境で生活することで、感染や事故にあう可能性が増大すると自覚すべきである。NGO 団体には、「現地カウンターパートとの協力体制が取れているか?」を、参加者には、「自己健康管理ができているか?」を確認する。近年、メンタル的に集団行動が取れず、ツアー中に孤立するケースが多い。過去の経験を共有し、警告する必要がある。プリントを渡しただけでは、見逃すことがある。互いに「自己責任であること」を自覚してもらう。

チェルノブイリに関わるウクライナは、途上国ではありませんが、日本国内での生活と同じように滞在することはできません。自己の健康管理や事故対策を心がけても、想定外のハプニングは起きる可能性があります。素人考えの安易な企画で、大きなリスクを負う可能性がありますし、その対応が NGO 全体に関わる不祥事に繋がる可能性もあります。

今回の勉強会で学んだことを踏まえて、次回以降のスタツアを企画していきたいと思います。(美)

竹内さんのウクライナ便り

前号の拙稿以来、ロシアとウクライナ、及び欧州諸国を巻き込んでの**天然ガス供給問題**が、日本では頻繁に報道されたようですので、この件についてここで改めて述べることはしません。ただ、某週刊紙の解説記事では、「12月31日、プーチン・ティモシェンコ両首相の間ですでに供給契約が締結される予定だったのが、土壇場になってユシェンコ大統領とロスウクルエネルギー社（ロシアのガスプロム社とウクライナのナフトガス社の間で仲介を行っている会社／以下「ロ社」と略記）が介入。怒り心頭に発したプーチン首相は、ガス供給停止に踏み切った」というさる筋の情報が紹介されています。2004年、クチマ前大統領時代に設立されたロ社の持株会社はスイス籍、さらにその会社の持株会社はオーストリア籍（だったと思います）。その結果、ロ社は税金を全くウクライナに納めておらず、同社の大株主フィルタシュ氏はここ数年でウクライナ有数の財閥を築いており、ティモシェンコ首相はロ社を廃止してガスプロム社とナフトガス社との直接取引を行うと何度も公言しているのですが、それが一向に実現されないのは、フィルタシュ氏に強力な政治的後ろ盾がついているため……と、やたらに政界の内幕に明るい同紙の副編集長は書いており（彼女の夫は元国防大臣の最高会議議員）、その後ろ盾というのはユシェンコ大統領でしかあり得ないだろうと匂わせています。「ロシアから供給されるガスを市場価格で購入することは、ロシアに対する依存を減らし、対等の立場をとるためにも必須の施策である」との説は、これまで各種マスコミでたびたび紹介されてきた意見ですが、今回、きわめて不透明なウ露政府間交渉の内幕はともあれ、それに向けて一歩が踏み出されたということになるでしょう。

しかし、この問題は**代替エネルギー源に関するウクライナのマスコミの関心をも喚起**し、林業廃棄物の木屑などを使うボイラーで暖房を行っている田舎の学校や、バイオガス製造装置を酪農農場に設置しているメーカー（外資系企業）のことも、TVニュースで紹介されて



<「えんどうまめ」石川さん(右)の依頼で、講演会の通訳(11.29 豊田市にて)>

供給所（集中暖房のスチームや集中給湯のシステムにもつながっている）では、ロシアがガス供給を停止した最後の数日、非常時に備えて備蓄されている重油をも使用したようです。もっとも今後、EUの方がより真剣に代替エネルギーの開発に取り組むことになるのではないかと思います。

一方、12月には**ウクライナの通貨グリヴナの対ドル・対ユーロ相場が急速に下落**、08年中ほぼ1ドル=5グリヴナ前後で推移していたのが、一時1ドル=10グリヴナにまで達しました。その後1ドル=6グリヴナにまで持ち直した後、1月に入っても安定せず、20日現在で1ドル=7.5グリヴナ程度です。その結果最も打撃を受けたのは、ドル建てで融資を受けていた企業や個人で、ローンの返済ができなくなり、マンションや車を手放さざるを得なくなるといった例も少なくないようです。国家統計委員会の発表によれば、08年中に**消費者価格指数は22.3%上昇**した由。輸入品の価格が上がっているのは当然で、ウクライナが農業国であることが庶民の救いといえるでしょう（石油価格が下がり始めてから、野菜などの価格は比較的安定しています）。キエフの地下鉄の料金（距離に関係なく一律）は、12月、50コペイカから2グリヴナへと一気に4倍に上がったものの、その後独占禁止委員会の監査の結果、また1グリヴナ70コペイカまで下がりました。もっとも、価格設定の客観的な根拠は結局示されないままでしたが。 (1月20日)

事務局便り

「門松」と同じ「松」つながりとはいえ、まさか新年を両「松」葉で迎えるとは予想だにできなかった。捻挫による、くるぶしの靭帯損傷とのこと。やっと「片松葉」になったが、結構完治には時間がかかりそうだ。このことから思うに、今年は「落ち着いて事をすすめよ」との啓示かもしれない。そう、今年は丑の年。確かに昨年はいやにバタついていたなと感じる。菜の花プロの展開も三年目を迎える。ゆっくりとは言わないが、吟味してじっくりと、と念じる。(山盛)

「ボランティア・マッチング展」に参加しました。 * * * * *

昨年の12月14日(日)に、名古屋NGOセンターとJICA中部との協働による、国際的な課題に関心を持つ人々が集まる「国際協力カレッジ2008」に参加してきました。午前と午後の部に分かれ、午後からはボランティアやインターンをしたい人達と、ボランティアやインターンを募集している団体とのマッチングを行いました。「チェルノブイリ救援・中部」のブースにきてくれた人の中で、『来年のNたま(次世代のNGOを育てるコミュニティ・カレッジ)に参加して、是非ここでインターンがしたいです。』と、なんとも嬉しい言葉も聞けました!! (山本)

* * * * *

☆「戦争は女の顔をしていない(群像社:2,000円/冊)」

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著(三浦みどり訳)

「…女も戦った。男に混じって戦った。でも勝利は男だけのもの…」

皆さんは、もう読破しましたか?

そして108号でご紹介した、「絵はがきセット」はいかがですか?

☆「ナロジチ…風下の村(200円/4枚組)」

ご購入を希望される方は、事務所迄ご連絡くださいね。



編集後記

☆2月代表団の航空チケットがなかなか取れない。燃油代もまだ下がっていないのに、なぜ?誰が?と思ったら、卒業旅行シーズン、円高だからなのでは…と。同じ世代に内定取消しや派遣社員的首切りもいて、ああ、なんという格差社会…(涙)。(京)

☆師走も押し迫った30日、住職は年越しの護摩焚きに備えて18時に床屋の予約をしていました。朝9時に通夜の連絡が入り、大慌て。打開策は「午後3時から通夜経を行う」。翌日の告別式には清々しい頭で登場し、1.5倍速で読経。師走は庶民だけでなく、住職だって忙しいよね。(美)

☆冬になると思うことがある。「Aソ連型」を「Aロシア型」と言い換えないのはなぜだろう?そろそろ「ソ連って何?」と言う平成生まれに、説明が必要になる時期が来るだろう。(佳)

☆世界中の期待を一身に集め、オバマ新大統領が誕生した。「金融危機」「中東紛争」など、山積する課題に対して、彼はどう立ち向かおうとしているのか?反ロシアの急先鋒「ズビグニュー・ブレジンスキー」、金融危機の元凶となった自由市場主義&グローバリズムの提唱者「オースタン・グルズビー」、そして投機家でおなじみの「ジョージ・ソロス」、我等の「ディビッド・ロックフェラー」…。彼のスポンサー・側近・ブレーンは、要注意人物であらわれている。しかし一方では、圧倒的多数の草の根サポーターもついている。あえてエールを送ろう。頑張れ!!オバマ!!(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473